

院内勉強会後に患者対応を行った新人看護師の意識の変化

廣納愛華¹、橋本知子¹、中岡義晴¹、森本義晴²

¹IVF なんばクリニック ²HORAC グランフロント大阪クリニック

《緒言》

近年、不妊治療の現場では社会的心理ケアの必要性が注目されている。経験豊富な看護師でも、不妊治療中の患者の心理状態を理解し情報提供や自己決定を支援することは難しいと感じることが少なくない。そこで今回新人看護師に対して実施した院内勉強会の効果について報告する。

《実践内容・方法》

対象者は不妊新人看護師 4 名。(入職 2 年未満,他科の看護師歴 3 年から 20 年)

1. アンケート：日々の患者との関わりの中で、具体的に困ったことを自由記述式で実施した。2. 勉強会：講義は悲嘆の 4 つの反応の分類（坂口幸弘、2010）に関する講義を受けた後に、流産事例を通し患者の反応を分類しディスカッションした 3. ワーク：1 ヶ月後に内容の習得度を確認することと、その間に対応した患者を振り返りカテゴライズすることを課題とした。

《結果》

1. 対象者 4 名全員が患者対応で困ったことがあると回答した。なかでも AMH 低値の結果説明、妊娠判定陰性、流産、終結などの危機的介入に対する不安感が強く対応困難であると分かった。また 4 名中 3 名が流産のキーワードをあげていた。
2. 流産をテーマに 1 つの事例だけでなく、実際に対応した患者の事例もディスカッションし 4 つに分類するという機会をもつことができた。
3. 勉強会 1 ヶ月後のワークでは、実際の患者を 4 つの反応に当てはめて考えたことはあるかとの問いに、はいが 3 名、どちらでもないが 1 名であった。

今回の結果からは実際の患者対応中に分類できていたかは不明であった。

今後の勉強会の内容としてクレーム対応、悲観的な時の対応、心理カウンセリング案内のタイミングなどの希望があった。

《考察》

患者対応後であれば反応の背景を考えようとしていることは確認できた。しかし、実際の患者対応中にそれを含めた看護ができていくか否かは不明であり 1 度の勉強会での習得は難しく、教育・訓練の機会を複数もつことが必要であると考えられる。